

カマラシーラのディグナーガ批判

— 唯識性の理解を巡って —

西沢 史仁

I. はじめに

シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) は、*Tattvasaṃgraha* (TS) 「外的対象の考察 (bahirartha-parīkṣā)」章において、唯識性 (vijñaptimātratā) の論証を主題として、詳細な議論を展開しており、これに対して、カマラシーラ (Kamalaśīla) は、*Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) にて詳細な註釈を与えている。この小論では、その全てを紹介することは無論できないが、最も基本的な唯識性の理解に関して、シャーンタラクシタとカマラシーラが、ディグナーガ (Dignāga) と根本的に相異なる立場に立っており、かつ、そのことを、カマラシーラは、ディグナーガの *Ālambanaparīkṣā* (ĀP) 及びその自註 *Ālambanaparīkṣāvṛtti* (ĀPV) を引用して明言していることを明らかにしたい¹⁾。またそれに加えて、当該箇所 of TSP の分析を通じて、ĀP/ĀPV に対して註釈書を著したヴィニターデーヴァ及びダルマパーラとカマラシーラの思想的関係についても検討したい。

II. シャーンタラクシタ及びカマラシーラの唯識性に関する基本的見解

まず最初に、この章で提示される彼らの唯識性に関する基本的見解を示しておこう。それは、TSP の章頭部にて、最も明確に、論証式の形で提示されている²⁾。TSP 550.13-15: tatra prayogaḥ yad yaj jñānaṃ, tat tad grāhyagrāhakatvadvayarahitam, jñānatvāt, pratibimbajñānavat | jñānaṃ cedam svasthanetrādijñānaṃ vivādāspadībhūtam iti svabhāvahetuḥ |

これに関して、論証式：

[遍充:] 何であれ知は、所取性と能取性の二者を欠いている。

[証因:] 知であること (=知性) の故に³⁾。

[喩例:] 例えば、影像の知の如し。

[所属性:] この議論の主題となっている健全な眼等の知は、知である。

[結論:] [故に、この議論の主題となっている健全な眼等の知は、所取性と能取性の二者を欠いている。]

以上は、自性因に基づく。

この論証式は、TS 2079 を前提としたものであり、それ故、シャーンタラクシタの見解に基づくものである⁴⁾。即ち、TS 2079:

vivādāspadam ārūḍhaṃ vijñānatvād ato manaḥ⁵⁾ | advayaṃ vedyakartrtvaviyogāt pratibimbavat ||

それ故、

[主張:] 議論の主題となっている知は、所知性と行為主体性を欠いているので、無二である。

[証因:] 知であること (=知性) の故に。

[喩例:] 例えば、影像の[知の]如し。

この所取と能取の非存在(=無二, advaya)の思想は、決して彼ら独自のものではなく、伝統的な唯識派の基本的教義の一つとして、初期唯識の典籍に頻繁に見い出せるものであるが、ĀP/ĀPVに見い出されるディグナーガの唯識性の理解は、これとは相異なるものとして、彼らに意識されている。そこで、次に問題となる箇所を検討しよう。

III. カマラシーラのディグナーガ批判

問題となるのは、本章の結論の部分に属する TS 2082-2083, 特に TS 2083 と、それに対する TSP である⁹⁾。この部分は、ディグナーガの唯識説が、TS では暗に、TSP では明示的に批判されている点で、非常に重要な箇所であるので、以下に、その和訳を与え、逐一分析を加えていこう。まず最初に、TS 2082-2083:

vijñānatvaṃ prakāśatvaṃ, tac ca grāhye nirāspadam | anirbhāsādyayogena vyāptis tenāśya niścītā ||
śaktāv anantare jñāne grāhyāṃśe viśayasthitih | tāttvikī nesyate 'smābhis, tena mānaṃ samarthate ||
知であることとは、顕現することであり、そして、それは、所取に依拠しないものである。

「[対象の] 顕現を有しない [知]」(TS 1999a) 等⁷⁾は不合理であるので、それ(=「無二であること」)によって、それ(=「知であること」)が遍充されていることが確定した⁸⁾。(2082)

効力が直前の知にあるときに所取分を対象として設定する[という]ことは、我々によって真実なものとは認められない。それ故、[以上の唯識性の] 論証(māna⁹⁾)が確立される。(2083)

ここで、TS 2083 において、「効力が直前の知にあるときに所取分を対象として設定する[という]こと」という見解が、シャーントラクシタによって、「我々によって真実なものとは認められない」と批判されている。これは、カマラシーラによれば、ディグナーガの見解である。即ち、TSP 582.11-13¹⁰⁾:

尊師ディグナーガによって、所縁縁(ālambanapratyaya)を設定するために、次のように説かれている。

[知の] 内部に認識されるべき形相(antarjñeyarūpa)は、恰も外部に在るかの如くに顕現するが、それが対象である。なぜならば、知の形相であるから。そしてまた、それ(=知)の縁であるから¹¹⁾。

と、即ち、これによって、[知の] 所取分を対象として設定することが説かれたのである。ディグナーガによれば、外的対象の如くに顕現する知の内部の形相、即ち、知の所取分(grāhyāṃśa)は、(1) 知の原因であること、(2) 知に自身の形象を引き渡すこと、という認識の二条件を充足しているので、知の対象、即ち、所縁縁として認められる。

さらに、カマラシーラは、TS 2083a の「効力が直前の知にあるときに」という部分を、ĀP/ĀPVを引用しつつ、こう註釈している。TSP 582.13-16¹²⁾:

さらにまた、[尊師ディグナーガによって] 次のように説かれている。「あるいはまた、効力を引き渡すこと(śaktyarpana)から、

継時的にでも (kramenāpi) [知の所取分は、知の縁で] ある。その対象の顕現 (arthāva-bhāsa) は、自身と相似した結果 (svānurūpakārya) の生起のために、知を所依とする (jñānādhāra) 効力を造る¹³⁾。それ故、矛盾しない (avirodha) 』¹⁴⁾

と。そして、これによって、直後の知 (anantarajñāna¹⁵⁾) に自身と相似した結果の生起の原因である効力を引き渡すことから、その [対象の] 顕現が原因であるということが、確立されたのである。

以上のように、TS 2083ab に示された唯識説は、ディグナーガの見解であること、少なくとも、カマラシーラはそう解釈していることが明らかになった。そして、この見解が、ここで批判されているのである。

しかるに、他方において、その直後の TSP を見るならば、このディグナーガの見解は、外界実在論に対する批判的立場としては評価されていることが判明する。即ち、TSP 582.16-20¹⁶⁾：

これに対して、同じ大徳 (bhadanta) によって論難が説かれている。即ち、

もし、感官知にとって、所取分が原因であるとしても、それ (= 感官知) は、それ (= 所取分) の顕現を有するものではないので、それ (= 所取分) は、感官が対象でないように、対象ではない。

等ということにより。

これに対して、曰く：「効力が」等と。「効力が直前の知にあるときに (śaktāv anantare jñāne)」というのは、別の基体を有する二つの第七格 (vyadhikaraṇasaptamyau) である。「直前の知に」というのは、アーラヤ [識] と呼ばれる (ālayākhyā) 等無間縁 (samanantarapratyaya¹⁷⁾) に、という意味であり、そこにおいて、効力は、同種の対象の顕現という縁によって確立されたものである。

ここで、「同じ大徳」とは、文脈から、前出のシュバグプタ (Śubhagupta) であることは、ほぼ確実である (TSP 582.1ff. 参照)。ここに引用された偈は、同様の主題を論ずる彼の *Bāhyārthasiddhikārikā* には見い出せず、未同定のままであるが、これは、ĀP I を前提としつつも、内容的には、ディグナーガの見解とは全く逆に、知の所取分が対象であることを否定するものである¹⁸⁾。この外界実在論の批判として、カマラシーラは、前述の ĀP/ĀPV を提示しているので、その意味で、全面的にディグナーガの見解を否定しているのではないことが分かる。ここには、外界実在論を、一段レベルの高いディグナーガ流の唯識説によって批判し、さらに、後者を、より一段レベルの高い自身の唯識説によって批判するという、段階的な議論の展開が見られる点で興味深い。

また、注目すべきは、ここで、「アーラヤ [識]」という概念が見い出されることである。唯識説を扱うこの *bahirartha-parikṣā* 章において、この概念が見い出せるのは、TSP では、唯一この箇所のみであり、TS には全く見い出せない。*Jñānasārasamuccayanibandhana* (JSSN) によれば、アーラヤ識を承認するか否かということは、有相唯識・無相唯識を区別するメルクマールの一つになるので¹⁹⁾、このことは、シャーントラクシタとカマラシーラの唯識説の、両者の思想的差異等をも含む傾向を判断するうえで、注目に値する。もっとも、注意すべきは、この箇所では、確かに「アーラヤ」という語自体は見い出されるが、カマラシーラは、決してこの概

念を積極的に宣説しているわけではなく、また、唯識説にとって特に大きな意味を持つこの概念を、今迄全く言及しなかったにも拘わらず、この文脈の中で敢て提示しなければならない必要性もないように思われることである。ちなみに、このアーヤ識という概念は、当の ĀP/ĀPV には一度も見い出せない。筆者は、この理由を、彼がアーヤ識という概念を積極的に支持していたことよりも、むしろ、ĀP に対する何らの註釈書、例えば、ヴィニターデーヴァ (Vinitadeva) の *Ālambanaparīkṣātikā* (ĀPT) 等からの影響に帰することができるかと解釈する。即ち、ヴィニターデーヴァは、まさにこの箇所 (ĀP 7b) に対する註釈の中で、アーヤ識という概念を提示しているのである。例えば、ĀPT P 194b3-6/D 184b5-7:

また、その所取分は、効力 (nus pa, śakti) を引き渡すとき、継時的に [自身と相似した知を] 生ぜしめる自性を有する対象となる。なぜならば、その所取分は、消滅するとき、アーヤ識 (kun gzi nam par śes pa, *ālayaviñāna) に効力を引き渡すからである。その効力は、もし第二刹那において諸共働因 (lhan cig byed pa, *sahakārin) が確立するならば、その時には、第二刹那のみにおいて、自身と相似した知を生ぜしめる。もし、[諸共働因が] 確立しないならば、その時には、第三刹那なり第四刹那なり随時に、これ (= 諸共働因) が確立したときに、[その効力は] 完熟して、自身と相似した知を生ぜしめる。²⁰⁾

このアーヤ識という概念は、ĀP/ĀPV のみならず、ダルマパーラ (Dharmapāla) の『観所縁論釋』にも見い出せず、それ故、現存する ĀP/ĀPV に対する註釈の中では、ĀPT にしか見い出せない。このことは、カマラシーラが ĀP/ĀPV のみならず、ĀPT をも参照していた可能性を示唆する²¹⁾。

以上のようなディグナーガの見解は、前述したように、「我々によって真実なものとは認められない」(TS 2083c) といって批判されるのであるが、その根拠をカマラシーラは、次のように示している。TSP 582.20-25²²⁾:

「真実なものとは認められない」というのは、「なぜならば、極微等と別異なるもの²³⁾が所縁であることは妥当ではないから」等々と尊師²⁴⁾によって説かれてから、「あらゆる点で所縁が否定される場合に、常識による拒斥 (pratibādhā) があり、同様に、『所縁縁性・増上縁性・等無間縁性・因縁性という特徴を有する四つの縁性が存在する』と経典に述べられていることから²⁵⁾、自派で承認されていることによる拒斥 (abhyupetabādhā) もある、「所縁縁は、経典 (sūtra) や世間の人々 (loka) において認められている通りに、世俗としては (samvṛtyā) 説かれるが、勝義として (paramārthataḥ) [説かれるの] ではない。勝義としては、全ての知は、無所縁である (nirāmbana)」と [尊師によって説かれたからである。] ²⁶⁾

ここで、所縁を否定する際に問題となる「常識による拒斥」と「自派で承認されていることによる拒斥」という二つの拒斥については、ディグナーガは言及していないが、ヴィニターデーヴァとダルマパーラは言及している。即ち、ĀPT P 192b6-8/D 183a2-3²⁷⁾:

以上のように、対論者の教義を否定してから、あらゆる点で所縁を否定する場合に、自派で承認されていること [による拒斥] と常識による拒斥 (khas blaṅs pa la grags pas gnod pa,

*abhyupetapratitibādha²⁸⁾)に陥るので、自身の教義において、所縁の設定を説くために、曰く：「[知の]内部に認識されるべき形相は」(ĀP 6a)等と。

『観所縁論釋』891b27-29:

「據内境體」(ĀP 6a)，謂立自宗所縁之事。若也總撥無所縁境，便有違世自許宗過(*abhyupetapratitibādha)。四種縁性於經說故。²⁹⁾

先に、カマラシーラはĀPTを受けてアーヤ識の概念を提示した可能性があるとは指摘したが、ここにも、TSPとĀPTとの関連を示す記述が見い出される。もっとも、ここでは、ĀPTよりもダルマパーラの『観所縁論釋』の記述の方が、よりTSPに近い。というのも、後者の註釈には、前者の註釈には見られない「四種の縁性が經典に説かれているから」という記述が見い出せるからである。それ故、単に、ヴィニターデーヴァとカマラシーラの関係のみならず、ダルマパーラとカマラシーラの関係をも考慮に入れる必要がある。同時に、ここに、所縁を否定する際に生ずるこの二つの拒斥を如何にして回避するかという問題に関して、ディグナーガ及びその註釈者達とカマラシーラ³⁰⁾の見解の相異が、如実に見い出せる。即ち、前述のĀPT等によれば、ディグナーガらは、所縁を否定する際に、この二つの拒斥を避ける為に、自身の教義において所縁を設定した。即ち、彼は、外的対象としての所縁を認めないが、知の内部の所取分を所縁として承認したのである。他方、カマラシーラらは、ディグナーガらのように、知の所取分を所縁として承認することはしない。そうではなく、彼は、この二つの拒斥を、二諦説に基づいて回避する。即ち、彼は、勝義としては、全ての所縁を否定するが、世俗としては、それを承認するのである。これは、カマラシーラらが、勝義としては、この bahirartha-parikṣā 章において確立された唯識説に依拠するが、世俗の立場では、外界実在論、端的に言えば、経量部の立場に基づいていることを示唆している点で、極めて重要な記述である³¹⁾。

このように二諦説に基づいて拒斥を排除することは、バーヴィヴェーカ (Bhāviveka) にまで遡ることができる。江島 [1980] によれば、バーヴィヴェーカは、中観の主張を述べる際に、「勝義として」という限定を主張に付加することによって、その限定がなければ生ずべき拒斥を回避する³²⁾。これは、ディグナーガには全く見られない、バーヴィヴェーカ独自の思想である。カマラシーラは、前述の二種類の拒斥を回避するのに、ディグナーガらの方法を採用せずに、バーヴィヴェーカと同様の論理を用いており、このことは、彼らの思想的関係を検討する上で、かなり重要な意味を持つように思われる。

以上、シャーントラクシタ・カマラシーラとディグナーガの間には、唯識性に関して、根本的な見解の相異が存在していることが明らかとなった。前者によれば、唯識性とは、単に、外的対象(=所取)の否定だけを意味するのではなく、所取の否定を前提とした、所取と能取の二者の否定(=無二)を意味している。他方、後者は、単に外的対象の否定をもって、唯識性を意味すると理解し、知の所取分を所縁として設定すること³³⁾によって、知の二相性を認めている。このように、シャーントラクシタ・カマラシーラは、確かに、ディグナーガが確立した仏教論理学の伝統を受け継ぎ、また、その無形象知識論批判に関しては、ディグナーガに遡る論法を適用していたが³⁴⁾、それにも拘らず、最も根本的な唯識性の理解に関しては、ディグナーガとは立場を異にするのである³⁵⁾。

IV. 最後に — カマラシーラのディグナーガ批判と有相唯識・無相唯識の問題との関係

この小論では、有相唯識・無相唯識という大きな問題全体に立ち入ることはできないが、焦点を、ここで議論されている知の無二相性と二相性の問題に絞って、最後に、少しだけ触れておきたい。TSP に引用され批判された ĀP 6 は、JSSN において、有相唯識派の典拠として挙げられている (n. 11 参照)。他方、カマラシーラは、TSP 182.6-7 [ad TS karmaphalasambandha-parikṣā 537] にて、自身が無相唯識派 (Nirākāravijñānavādin) であることを明言している³⁶⁾。それ故、カマラシーラらの、この二相性に基づくディグナーガの唯識説に対する批判は、一歩進んで、ディグナーガの有相唯識説に対する批判、及び、カマラシーラらの無相唯識説支持を示唆しているように見える。しかし、この知の二相性・無二相性と有相唯識・無相唯識の関係に関しては、かなり微妙な問題が潜在しており、安易に、無二相性を説く唯識派が無相派であり、二相性を説く唯識派が有相派であると速断することはできない。例えば、先に触れた JSSN には、ĀP 6 が有相派の典拠として挙げられているにも拘わらず、唯識派一般の基本的教義として「所取と能取を離れた知は、勝義として存在する (gzun dan 'dzin pa las grol ba'i rnam śes dam pa'i don du yod)」(JSSN 26ab) と説かれている。同様に、チベットの宗義書 (grub mtha') 文献の一つである、ウパロセル (dBu pa blo gsal) の *Blo gsal grub mtha'* (BSGT) には、有相派と無相派の両者に共通する教義として、(1) 外的対象は真実として存在するものではないこと、(2) 知の自己認識、(3) 所取・能取の二者を欠いた知という知覚は勝義として存在すること、という三つが挙げられているが、そこでも、無二相性は、唯識派の一般的教義の一つとして提示されている (BSGT 101.9-10 参照)。このように、所取・能取の非存在は、有相派と無相派の両者に共通する教義であり、決して無相派独自の教義ではない³⁷⁾。それ故、ここで、単に、カマラシーラらが、二相性を説くディグナーガの唯識説を批判し、知の無二相性を宣説していることだけによって、彼らが無相派であると主張することはできない³⁸⁾。

問題は、カマラシーラが自身を無相派と規定するとき、その根拠を明示していない — 少なくとも、筆者は、彼が自身でその根拠を明示している箇所をまだ TSP において見出ししていない — ので、彼が、TSP の段階で、有相唯識・無相唯識に関して如何なる見解を有していたのかということは不明であることである。少なくとも、この TSP bahirartha-parikṣā 章を見る限りでは、その根拠は明示されておらず、依然として不明のままである。それ故、後代の綱要書やチベットの宗義書に見い出される半ば形式化した基準や、中観説に依拠する後の *Madhyamakālamkāra* (MA) 等に見い出され思想的発展が予想される所の基準を、無条件的にそこに持ち込むことの妥当性も決して自明ではない。さらに、カマラシーラが無相唯識派に属するとしても、それは、即座に、この bahirartha-parikṣā 章で確立された唯識説が無相唯識説であることを意味するわけではない。筆者は、この点に関しては、むしろ否定的である。というのは、この章の目的は、あくまで外界実在論を否定して唯識説を確立することであり、有相唯識・無相唯識を議論することではないからである。ちなみに、後の MA では、有相・無相の問題は、その確立された所の唯識説に対する批判的考察の結果として出てきたものである。即ち、MA では、まず最初に、MA 43 までの間に、外界実在論が批判され、MA 44 にて唯識説が提示され、ついで

MA 45 以下に唯識説の批判的吟味が為されている。そして、有相唯識・無相唯識の議論は、この MA 45 以下に展開されているのである。この問題は、特に、この MA 等において詳細に論じられており、それについては、先学の多くの研究が蓄積されている。加えて、それ以外の資料に基づいた、より一般的な先行研究も決して少なくない。また、この問題は、TS/TSP では、この bahirartha-parikṣā 章ではなく、むしろ最終章の atīndriyadarśipuruṣa-parikṣā 章において触れられており、その検討が不可欠である³⁹⁾。しかし、紙面の関係上、この問題の詳細を本論考では扱う余裕はないので、先学の諸研究への言及を含めて別稿を期することにし、本論考では、カマラシーラ及びその師シャーントラクシタのディグナーガの唯識説に対する批判は、彼らが別系統の唯識説に依拠していることを示していると言うに留めたい。

なお、TS/TSP bahirartha-parikṣā 章全体を視野に置いた、シャーントラクシタとカマラシーラの唯識説については、別稿にてより詳細に論ずる予定である⁴⁰⁾。

<略号表及び使用テキスト>

- AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu): AKBh を見よ。
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): *Abhidharma Kośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. Tibetan Sanskrit Work Series 8. Patna, 1967.
- ĀP *Ālambanaparikṣā* (Dignāga): Frauwallner [1959] 157-161.
- ĀPV *Ālambanaparikṣāvṛtti* (Dignāga): ĀP を見よ。
- ĀPT *Ālambanaparikṣāṭīkā* (Vinitadeva): P 5739 ze 183a7-197b7/ D 4241 ze 175a3-187b5
- JSSN *Jñānasārasamuccayanibandhana* (Bodhibhadra): Katsumi Mimaki, *La réfutation bouddhique de la permanence des choses (sthīrasiddhidūṣana) et la preuve de la momentanéité des choses (kṣārabhaṅgasiddhi)*. Paris, 1976. 183-207.
- TS *Tattvasamgraha* (Śāntarakṣita): *Tattvasaṅgaraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Ed. Embar Krishnamacharya. 2 vols. GOS 30-31. 1st ed. Baroda, 1926. rpt. Baroda, 1984 (Vol. 1), 1988 (Vol. 2).
- TSP *Tattvasamgrahapañjikā* (Kamalaśīla): TS を見よ。
- PV III. *Pramāṇavārttika* 第三章 (Pratyakṣa 章): 戸崎 [1985] を見よ。
- PVin I. *Pramāṇaviniścaya* 第一章 (Pratyakṣa 章): Tilman Vetter, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, 1. Kapitel: Pratyakṣam. Einleitung, Text der tibetischen Übersetzung, Sanskritfragmente, deutsche Übersetzung*. Wien, 1966.
- PS I. *Pramāṇasamuccaya* 第一章 (Pratyakṣa 章): 服部 [1968] を見よ。
- BSGT *Blo gsal grub mtha'* (dBus pa blo gsal): Katsumi Mimaki, *Blo gsal grub mtha'. Chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édités et chapitre XII (Mādhyaṃika) édité et traduit*. Zinbun Kagaku Kenkyusyo (Université de Kyoto). Kyoto, 1982.
- MA *Madhyamakālaṅkāra (kārikā)* (Śāntarakṣita): Masamichi Ichigō, *Madhyamakālaṅkāra of Śāntarakṣita with his Own Commentary or Vṛtti and with the Subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla*. (=一郷 [1985] の別巻)

『觀所緣論釋』 觀所緣論釋 (1 卷) . 護法菩薩造. 義淨譯 : 大正 1625.

- BBS Bauddha Bharati Series. 但し, テキスト中では TS/TSP の BBS 版の読みを意味する :
Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalaśīla.
Ed. Swami Dwarikadas Shastri. 2 vols. BBS 1-2. 1st ed. Varanasi, 1968. rpt. 1981
(Vol. 1), 1982 (Vol. 2).
- D sDe dge 版.
- GOS Gaekwad's Oriental Series. 但し, テキスト中では TS/TSP の GOS 版の読みを意味する.
TSP を見よ.
- P Peking 版.
- Pa TS/TSP GOS 版が基づく Pattan 写本. 但し, 筆者はこの写本を入手することができなかった
ので, GOS 版テキスト中に示されている読みに限定される.
- TS Index Shoko Watanabe, *Glossary of the Tattvasaṅgrahapañjikā — Tibetan-Sanskrit-Japanese Part I* —.
『インド古典研究』 (Acta Indologica) 5. 1985.
- * 筆者が想定した形.
- に訂正せよ.
- [...] 補足.
- (...) 換言, 原語の提示. 但し, テキスト中では, 採用されなかった異読を示す.
- 太字 偈中の語.
- 下線 強調.

(註記)

- 1) この引用は, 既に, La Vallée Poussin [1930] 296-297, Chatterji [1930] 196-199 によって同年に指摘されているが, これが批判の対象として引かれたものであることは, これまで明らかにされていない。
- 2) カマラシーラは, 後に, この論証式を, 「根本的な (maula) 」論証式と明言している。
TSP 580.27 参照.
- 3) この論証式の形式は, 変則的である. というのも, 遍充関係と主題所属性の二つを挙げるダルマキールティ流の論証式では, 証因の提示は不用であるが, ここではそれが示されているからである. これは, ここに限らず, TSP 566.22-23 等に示される論証式にも見られる現象である. ちなみに, シヤーンタラクシタは, TS では, ディグナーガ流の三支作法を多用しているのに対して, カマラシーラはそれを TSP でダルマキールティ流の二支からなる論証式に直している. シヤーンタラクシタは, 無論, ダルマキールティ流の論証式を知悉していたはずであるから, 彼が TS において三支作法を多用する理由が判然としない。
- 4) 若原 [1982] 55f. 参照.
- 5) mataḥ (sic) BBS; Tib. yin → yid (= manas), cf. Pratika in TSP: yid.

- 6) この箇所には、G. Jha 氏の英訳 (TS/TSP) と太田心海氏の和訳 (TS のみ) がある。Jha [1939] 987-988; 太田 [1970] 41-42 参照。但し、筆者はこれらの訳と解釈を幾つか異にするので、以下に和訳を挙げておく。なお、G. Jha 氏は、TS 2082 に対する細註を、TSP 582.10-16 と解釈しているが、これは不適切である。筆者の理解では、これは、TSP 582.10-11 に限定される。(ちなみに、以下、TSP 582.11-25 は、TS 2083 に対する細註である。) 他方、太田氏は、この箇所の細註には特に言及していない。
- 7) 「顕現を有しない [知] 」とは、無形象 (nirākāra, TSP) 知を意味し、「等 (ādi) 」という語は、有形象 (sanirbhāsa, TS; sākāra, TSP) 知と異形象 (anyanirbhāsa, TS; viṣayākārād anyākāra, TSP) 知を合意する。TS では、外的対象の認識形態として、この三種類が理論的に設定されている。TS 1999, TSP ad TS 1999 参照。
- 8) この遍充関係は、根本論証式を提示する TS 2079 に示されたものであるので、この二つの代名詞も、それに基づいて解釈すべきである。カマラシーラの註釈 (TSP582.10-11) では、恰も TS 1999 において、この遍充関係が論証されたように見えるが、これは混乱を招く曖昧な註釈である。シャーントラクシタは、TS 1999 に示された外的対象の可能的な三つの認識形態が不合理であることにより、TS 2079 に示された唯識性を示す遍充関係が確定されるということを、当偈で説いているのである。
- 9) 所取・能取の二者の非存在としての唯識性の論証のこと。ちなみに、パーダ d の蔵訳は、“des na de ni ma bsgrubs so” であり、この “mānam” という語とはテキスト的に相応しない。なお、この語の解釈については、桂紹隆先生から注意を喚起されたことを明記しておく。
- 10) *ācārya-Dignāgapādair* ālambanapratyayavyavasthārtham uktam:
 yad antarjñeyarūpaṃ tu bahirvad avabhāsate |
 so 'rtho, vijñānarūpatvāt¹ tatpratyayatayāpi ca || (ĀP 6)
 iti | anena hi grāhyāṃṣe viṣayavyavasthā pratipādītā |
 1. jñānarūpatvāt Pa; Tib. mnam śes ŋo bo'i phyir
- 11) =ĀP 6. この同定については、n.1 参照。ĀP 6 は、以下の書にも引用されている：*Pramāṇavārttikaṭīkā* (Śākyabuddhi) P 255b3-4 (pāda ac のみ), cf. 岩田 [1981] 156, n. 47; JSSN 202.7-9 (pāda ac のみ), cf. JSSN n. 437; *Sarvadarśanasamgraha* [ed. by V. S. Abhyankar] 35.3 (pāda ab のみ), cf. JSSN n. 437; BSGT XI. 100.5-7 (pāda ac のみ), cf. BSGT n. 302; *Grub mtha' chen mo* [Bkra sis 'khyil ed.] fol. 265b1 (pāda ac のみ). JSSN では、当偈が有相唯識派の典拠として引用されていることは注目に値する。即ち、JSSN 202.2-11: 「ここで、瑜伽行派は、二種類である。即ち、有相派と無相派である。このうち、有相派とは、尊師ディグナーガ等の主張する所であり、形象 (*ākāra) は依他起 (*paratantra) であると説く。即ち、・・ (ĀP 6ac) 等と説かれている。〔有相派は〕六識論者である。」また、当偈は、恐らくこの JSSN を受けて、BSGT, *Grub mtha' chen mo* でも有相唯識派の典拠として提示されている。
- 12) punar apy uktam: “atha vā
 śaktyarpaṇāt (ĀP 7b)

kramenāpi | so 'rthāvabhāsaḥ svānurūpakāryotpattaye śaktiṃ vijñānādhārām¹ karotity avirodha" iti | anenānantarajñāne² svānurūpakāryotpattinimittasaktisamarpaṇāt kāraṇatvaṃ ca³ tasya pratibhāsasya samarthitam ||

1. vijñānācārām Pa GOS BBS; Tib. mam par śes pa'i rten can, cf. ĀPV 160.29-30: vijñānādhārām.

2. Tib. don gzan ma yin pa'i śes pa la = anarthāntarajñāne, cf. TS Index.

3. 一見して、この接続詞 ca の機能が判然とせず、その位置もやや不自然に見える。しかし、これは "... grāhyāmśe viśayavyavasthā pratipāditā" (TSP 582.13) と "... kāraṇatvaṃ tasya pratibhāsasya samarthitam" という二つの文を結ぶ機能を果たしていると解釈できるので、除去しないで残しておく。(なお、この ca については、京都大学の船山徹氏から注意を促された。)

13) 玄奘は、この記述に見い出される jñāna という語を、特に「本識」 (=アーラヤ識) と訳している。これに対して、L. Schmithausen 氏はこの解釈に反対して、これを「経量部の『単層の』知の流れの意味で (im Sinne des "einschichtigen" Erkenntnisstromes der Sautrāntikas)」理解すべきであるとしている。Schmithausen [1967] 126.10-14 参照。しかるに、カマラシーラは、後で (TSP 582.19), これを、「アーラヤ [識]」と換言しており、玄奘の解釈と一致する。ヴィニーターデーヴァも、この一文に対する註釈の中で、"jñānādhāra" を、"kun gzi nram par śes pa'i rten can (*ālayavijñānādhāra)" と換言している。これについては、n. 20 参照。

14) = ĀP 7b/ĀPV 160.16-20. この同定については、n. 1 参照。

15) anantara という語は、基本的には「無間の」という意味であるが、文脈に応じて、「直前の」と「直後の」という二つの意味の何れかに訳し分ける必要があり、それは文章全体の解釈にまでかわるので、決して瑣末な問題ではない。先に TSP 2083a に見られたこの語を、筆者は、後述する TSP の解釈 (anantara = samanantara[pratyaya]) に従って、「直前の」という意味で解釈した。しかし、この箇所では、文脈に従って、この語を「直後の」という意味で解釈する。(この語の解釈について、桂先生から注意を促されたことを付記しておく。)

16) atra tenaiva bhadantena dūṣaṇam uktam:

yady apindriyavijñapter grāhyāmśaḥ kāraṇam¹ bhavet |

atadābhatayā tasyā nākṣavad viśayaḥ sa tu ||

ityādinā |

atrāha: śaktāv ityādi | śaktāv anantare jñāna iti vyadhikaraṇasaptamyau | anantare jñāna iti samanantarapratyaya² ālayākhye yā śaktis tathāvidhārthapratibhāsapratyayasamarthitā³ |

1. kāraṇam Pa GOS BBS; Tib. rgyu = kāraṇam, cf. ĀP 1: kāraṇam.

2. samantarapratyaye (sic) BBS.

3. Tib. は、°pratyaya° に相当する語を欠く。

17) ālaya という語は、PV III. 520 にも見い出せる。それに対するブラジュニャーカラグプタの註釈 (Pramānavārttikabhāṣya, PVBh) には、アーラヤ識と等無間縁を巡る議論が見い出されるが、この両概念に関する理解は、カマラシーラのそれとは全く相反する。即ち、カマラシー

ラが、両者を同一視するのに対して、プラジュニャーカラグプタは、相反する概念と見做しているからである。PVBh の文脈では、等無間縁は、アーラヤ識から転識が生ずるのを無効化するより強い力を有するものと見做されており、アーラヤ識は、単に「あるいは、習気の所依として、それ（＝アーラヤ識）が承認されても、過失ではない（*vāsanādhāratayā vā parikalpitan tad iti na doṣaḥ*）」（PVBh [ed. by R. Sāṅkṛityāyana] 457.26-27）という形で消極的に承認されているに過ぎない。カマラシーラが、一般的には表層的と見做される等無間縁を、深層的なアーラヤ識と同一視する際、彼が転識とアーラヤ識の関係について如何なる見解を有していたかということは、興味深い問題であるが、これはここでは全く述べられていない。詳細は後述するが、恐らく、彼がここでアーラヤ識の概念を提示する背景には、ĀP/ĀPV に対する何らかの註釈の影響があり、TSP において彼自身が積極的にアーラヤ識を承認していたとは思われない。PV/PVBh におけるアーラヤ識については、Schmithausen [1967] 127-129 参照。なお、PVBh のこの箇所に、アーラヤ識と等無間縁の議論が見い出されることについては、桂先生から御教示戴いた。

- 18) この偈が、ĀP1 の変形であることは、既に、Poussin [1930] 297 に指摘されている。また、神子上恵生氏によって指摘されているように、これは *Bāhyārthasiddhikārikā* には見い出せない。神子上 [1983] 1. 参照。参考までに、ĀP1 を挙げておこう。

yady apindriyavijñāpteh kāraṇaṃ paramāṇavaḥ | atadābhatayā nāsyā aksavad viṣayo 'ṇavaḥ ||
 両偈は、多少の相異は見られるが、grāhyāṃśa TSP/ paramāṇu ĀP の部分を除けば、ほぼ対応する。

- 19) JSSN によれば、アーラヤ識の存在を認めるのは、無相派の特徴である。JSSN 202.12-25: 「無相派は、尊師聖アサンガ等であり、彼らは、形象は、ティミラ眼病者にとっての髪等の如くに、遍計所執（*parikalpita）であると説く。・・・[無相派は] 八識論者であるが、或る者は、一識論者である。」ここで「八識論者」とは言うまでもなく、アーラヤ識の存在を認める者である。先に有相派は六識論者であるという JSSN の説を紹介したが、このような分類は、チベットの諸宗義書にも受け継がれている。袴谷 [1976] 4-8, 15, 19-20 参照。

- 20) 山口・野沢 [1953] 470 参照。他には、ĀPT P 194b8-195a1/D 185a2-3: 「なぜならば、継時的にでも、その所取分は、自身と相似した結果の生起のために、アーラヤ識を所依とする効力を造るからである。」（山口・野沢 [1953] 471 参照。）

- 21) TSP には、ĀPT と平行する文章が見い出せる。例えば、TSP に定説 (siddhānta) として示された見解 — 但し前主張の中であるが — が、ĀPT に見い出せる。即ち、TSP 551.20: athāpi syāt: samuditā evotpadyante vīnaśyanti ceti siddhāntāt ...; ĀPT P 185a4/D 176b2-3: rduḥ phra rab 'dus pa kho na skye žiñ 'gag mod kyi |. 但し、同様の記述は、『ダルマパーラの註釈にも見い出せる。『観所縁論釋』889b19: 雖復極微唯共聚已而見生滅。— ĀPT と『観所縁論釋』の対応については、山口・野沢 [1953] 432 n. 12 参照。

既に、一郷正道氏によって、著作目的の理解に関して、カマラシーラとヴィニータデーヴァの間に共通性が見られることが既に指摘されている。一郷 [1985] 3, 7-9 参照。

ヴィニータデーヴァの年代については、ダルマキールティ (ca. 600-660) の著作に註釈を著している点から、ダルマキールティ以後であり、ダルモッタラの *Nyāyabinduṭīkā* にて彼の見解が批判されていること (D. Malvania ed. Intro. xxvi 参照) から、ダルモッタラ以前であることはほぼ確実である。ダルモッタラの年代は、H. Krasser 氏によって、かなり確実に設定された。同氏によれば、彼の年代は ca. 740-800 である。Krasser [1992] 157 参照。他方、カマラシーラの年代に関しては、依然として E. Frauwallner 氏の考証 (ca. 740-795, cf. Frauwallner [1961] 141-144.) が大筋において有効であるので、ダルモッタラとカマラシーラはほぼ同時代人であると言えよう*。それ故、ヴィニータデーヴァは、カマラシーラより年代が遡ることはほぼ確実であり、もし両者の間に何らかの関係があるならば、それは、前者から後者に対するものであり、その逆ではない。

また、ヴィニータデーヴァの年代は、近年、船山徹氏によって、シャーキャブッディとアルチャタの間にまで狭められ、ca. 690-750 という年代が設定された。船山 [1994] 55f. 参照。また、同氏によれば、直接知覚説に関して、ジネードラブッディ・カマラシーラ・ヴィニーターデーヴァはほぼ同一の註釈をすることである。ibid. 54, n. 3 参照。(船山 [1994] については、船山氏御自身から御教示を受けたことを明記しておく。)

* 山口瑞鳳氏は、カマラシーラの没年を 797 年に設定している。山口 (瑞) [1978] 12, 23 参照。

22) *tātvikī neṣyata* iti “yataḥ paramāṅvāder vyatirikṭasyāḷambanātvaṃ na yujyata” iti vistareṇa pratipādyācāryeṇa¹ “mā bhūt sarvathāḷambanapratiṣedhe pratitibādhā, tathā ‘āḷambanādhipatisamanantarāhetupratyayatvalakṣaṇāś² catasraḥ pratyayatā³” iti sūtre vacanād abhyupetaḥ bādhāpi” ti avirodha-pratipādanāya “yathāvidha āḷambanapratyayo ’bhipretaḥ sūtre loke ca, tathā pratipāditam saṃvṛtyā, na paramārthataḥ | paramārthatas tu nirāḷambanāḥ sarva eva pratyayā” iti ||

1. pratipāditam cācāryeṇa GOS.

2. °tvasvalakṣaṇāś GOS.

3. pratyayitā Pa GOS BBS. AKBh の読みに従う。Cf. n. 25.

23) ここで、「極微等」の「等」という語は、ĀPにおいて、極微の他に、所縁として外的対象として想定されたもの、即ち、積集 (‘*dus pa*, cf. ĀPV 158.8) 及び積集の諸形象 (‘*dus pa’i mam pa dag*, cf. ĀP 3) を含意する。そして、それらとは「別異のもの」というのは、知の所取分のことである。

24) この「尊師 (ācārya)」が誰であるのかが問題である。一見すると、前出 (TSP 582.11) の尊師ディグナーガであるように見える。しかし、その尊師によって説かれた内容を見るならば、それはディグナーガのものではありえない。即ち、ここでは、極微等とは別異のもの、即ち、知の所取分が所縁であることが否定されているが、これはまさに TSP によればディグナーガ批判なのである。そして、それは TS 2083 にて為されているので、ここで尊師とは、シャーンタラクシタに他ならない。ちなみに、宇井伯寿氏は、この尊師の見解を、ディグナーガのものと誤解している (宇井 [1958] 72-76 参照)。

25) Cf. AKBh 98.3-6: pratyayāḥ katame |

catvāraḥ pratyayā uktāḥ (AK II. 61c)

kvoktāḥ | sūtre | “catasraḥ pratyayatāḥ | hetupratyayatā samanantarapratyayatā ālambanaprayayatā adhipatipratyayatā ce”ti | pratyayajātiḥ pratyayatā |

ここに示された「経典」については、『国訳一切経』（毘曇部 25）307 n. 3 参照。そこには以下の典拠が指摘されている。『縁生初勝分法本經』（大正 No. 716）833b13-14: 比丘白佛。大徳、有四种縁世尊所説。謂因縁・無間縁・攀縁・増上縁。；『分別縁起初勝法門經』（大正 No. 717）840b25-26: 復次世尊如餘處説。縁有四种。所謂因縁・等無間縁・及所縁縁・并増上縁。 — 但し同註によれば、これらも孫引きであるらしい。

26) この一文には、iti で示される引用らしき三つの文章 (n. 22 に提示したテキストのうち “...” で示した部分) が見い出せる。これは、尊師 (=シャーントラクシタ) の見解として提示されたものであるが、これが、字句通りの引用なのか、あるいは、単に、カマラシーラが尊師の見解の大意を纏めたものなのかが問題である。私見では、そこには、経典からの引用を含む極めて具体的な記述が見い出されるので、単なる自由な引用ではなく、何らかの具体的な典拠に基づく可能性が極めて高い。ちなみに、TS bahirartha-parikṣā には、この引用の根拠となるような偈は見い出せない。もしこれが字句通りの引用であるならば、直後の TS 2084 にその書名のみが引かれるだけで散逸したシャーントラクシタの著作『勝義決択 (Paramārthavinīścaya) 』の断片の可能性がある。TS 2084 に見られるこの “paramārthavinīścaya” という語が、著作名であることは、既に一郷氏によって指摘されており (一郷 [1985] 201 n. 49 参照), MAV にも、TS と並んでその名が引用されている。MAV 330.11-15: 「さらに、自派と他派の教義を詳細に考察することにより、この、全ての戯論の集まりを離れた縁起を、『タットヴァサングラハ』や『勝義決択 (Don dam pa gtan la dbab pa) 』等において、既に検討したが、もっと詳しく知りたい者達は、それらに基づいて理解すべきである。」 (一郷 [1985] 193 参照。)

この著作の具体的内容については知られる所は殆どないが、ただ、数少ない断片的な資料から言えることは、(1) この著作の名前はTS に引用されているので、TS 以前の著作であり、(2) TS 2084 に示唆されているように、「唯識性の成立 (vijñaptimātrāsiddhi) 」を主題とし、(3) MAV に述べられているように、「戯論の集まりを離れた縁起」を論ずるものである。それ故、TS 同様に、唯識説に依拠する著作であることが予想される。カマラシーラが、ここで師の見解を引用するとき、TS bahirartha-parikṣā と同様の主題を扱い、直後の TS 2084 にその名が見い出される *Paramārthavinīścaya* という著作を意識していたことは大いにありえることである。しかも、詳細は後述するが、彼は、勝義 (paramārtha) の立場で、唯識性を説いているが、これは、この著作の題名を連想させるものであり、全く無関係とも思われない。但し、この著作が散逸している以上、その断片の同定に関しては、確実なことは何も言えないので、今は、その可能性を示唆するに留める。

27) de ltar gžan gyi gzuñ lugs bkag nas rnam pa thams cad du dmigs pa bkag na(nas D) | khas blañs pa la grags pas gnod par 'gyur du 'on bas('ons pas D) rañ gi gzuñ lugs la dmigs pa rnam par bžag(gžag

D) pa bstan pa'i phyir | śes bya nañ gi ño bo ni zes bya ba la sogs pa smos te |

- 28) 平行するテキストの読みから判断して, “khas blañs pa la grags pas gnod pa” は, pratitibādāhā と abhyupetabādāhā の並列複合語 “abhyupetapratitibādāhā” の誤訳と解釈すべきである。
- 29) ĀPT と『觀所緣論釋』との対応については, 山口・野沢 [1953]466n.1 に, 『觀所緣論釋』と TSP との対応については, 宇井 [1958] 109 に指摘されている。
- 30) TS の中では, シャーンタラクシタはこの問題を議論していないが, カマラシーラのこの見解は, 先に指摘したように (nn. 24, 26 参照), シャーンタラクシタの見解を受けているものと推定されるので, シャーンタラクシタの見解とも見做しえよう。
- 31) これは TS/TSP 全体に関わる重大な問題であるので, その詳細については別稿を期する。
- 32) 江島 [1980] 105-110 参照。この点に関しては, 江島恵教先生から御教示戴いた。
- 33) このことは, TSP に引用された ĀP/ĀPV のみならず, PS においても同様である。例えば, PS I. 11ab では, 知の二相性, 即ち, 知が所取と能取の二相を有することが論証されている。服部 [1968] 29-30 参照。
- 34) 例えば, 無形象知識論批判の一環として TS 2023-2028 及びそれに対する TSP において, 別の知によって知は認識されないことが論証されているが, これは, PS I. 12 及びその自註に端を発する論法を踏襲したものである。服部 [1968] nn. 1.77, 80 参照。
- 35) 但し, ディグナーガには, 無二の思想を説く著作, 例えば, *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgraha* などもあるので, 彼の唯識思想の変遷をも考慮する必要がある。彼の思想的展開については, Frauwallner [1959] に詳しい。それによれば, *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasamgraha* は, 彼の最初期の著作であり, Maitreyanātha 流の唯識説の影響下に著されたのに対して, ĀP/ĀPV は彼の成熟期の著作であり, 経量部の学説を前提としたものである。ibid. 116.2ff. 参照。
- 36) 渡辺 (照) [1967] 74 参照。なお, カマラシーラの無相唯識派的傾向の背景には, 無相派と見做されているダルモッタラ (Dharmottara) の影響の可能性がある。両者はほぼ同時代人であり, かつ, TSP と *Pramānaviniścayaṭīkā* の間には, 平行する文章が見い出されることが既に指摘されている。松本 [1980] 21; 岩田 [1991] Vol. 2, 82 n. 8; Krasser [1992] 152ff. 参照。
- 37) 森山清徹氏によって, 所取・能取の形象については, 有相派・無相派共にそれを遍計所執性と見做す点で共通するが, 青等の形象については, 前者がそれを依他起性と見做すのに対して, 後者はそれを遍計所執性と見做す点に, 両派の相異がある, という趣旨の論考 (森山 [1993]) が公けにされている。
- 38) それにもかかわらず, ウパロセルは, その後で (BSGT XI. 101.13-103.4), 有相派 (= 形象真実派, rNam bden pa) と無相派 (= 形象虚偽派, rNam brdzun pa) の両者に立脚する者として, ヴァスバンドゥと共にダルマキールティ (Dharmakīrti) を挙げ, その典拠を各々提示しているが, そこでは, 有相説の典拠 (PVin I. 59ac) には, 二相性が, 無相説の典拠 (PVin I. 39-40 = PV III. 330c-332b) には, 無二相性が説かれており, 依然として, 二相性・無二相性が有相唯識・無相唯識のメルクマールになる可能性が残されている。それ故, この問題は,

簡単には解決しがたく、さらなる検討を要するものである。

39) 渡辺 (重) [1988] 参照.

40) 筆者は、現在、TS/TSP bahirartha-parikṣā 章全体の訳註研究を用意しており、機会が得られれば将来何らかの形で発表する予定である。

(参考文献)

- 一郷 正道 [1985] 『中観莊嚴論の研究 — シャーンタラクシタの思想 —』, 京都: 文栄堂.
- 岩田 孝 [1981] Śākyamati の知識論, 『Philosophia』 69, 143-164.
[1991] *Sahopalambhaniyama. Struktur und Entwicklung des Schlusses von der Tatsache, daß Erkenntnis und Gegenstand ausschließlich zusammen wahrgenommen werden, auf deren Nichtverschiedenheit. 2 vols. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.*
- 宇井 伯寿 [1958] 『陳那著作の研究』, 東京: 岩波書店.
- 江島 恵教 [1980] 『中観思想の展開 — Bhāvaviveka 研究 —』, 東京: 春秋社.
- 太田 心海 [1970] 認識の対象に関する考察 Tattvasaṃgraha, Bahirartha-parikṣā の和訳研究 (下), 『佐賀龍谷学会紀要』 17, 26-44.
- 戸崎 宏正 [1985] 『仏教認識論の研究 — 法称著『プラマーマ・ヴァールティカ』の現量論 —』 (下巻), 東京: 大東出版社.
- 袴谷 憲昭 [1976] 唯識の学系に関するチベット撰述文献, 『駒沢大学仏教学部論集』 7, 256-232.
- 服部 正明 [1968] *Dignāga, On Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya, from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions.* Cambridge, Massachusetts.
- 船山 徹 [1994] 8世紀ネーランダー出身注釈家覚え書き — 仏教知識論の系譜 —, 『日本仏教学会年報』 60, 49-60.
- 松本 史朗 [1980] Sahopalambha-niyama, 『曹洞宗研究員研究生紀要』 12, (1)-(34).
- 神子上 恵生 [1983] シュバグプタの極微説の擁護 — 知識の認識対象の問題をめぐる —, 『龍谷大学仏教文化研究所紀要』 22, 1-17.
- 御牧 克己 [1993] Annotated Translation of the Chapter on the Yogacāra of the Blo gsal grub mtha' — Part One —, 『京都大学文学部研究紀要』 31, 1-49.
- 森山 清徹 [1993] 後期中観派と形象真実論及び形象虚偽論 — 形象 (ākāra) と三性説 —, 『印仏研』 42-1, (92)-(98).
- 山口 瑞鳳 [1978] 吐蕃王国仏教史年代考, 『成田山仏教研究所紀要』 3, 1-52.
- 山口 益・野沢 静証 [1953] 『世親唯識の原典解明』, 京都: 法蔵館.
- 若原 雄昭 [1982] 知識の真偽性 — 外界存在をめぐる論争の一局面 —, 『南都仏教』 49,

55-77.

- 渡辺 重朗 [1988] *Tattvasaṅgraha* XXVI, kk 3247-3261 et kk 3622-3646, 『成田山仏教研究所紀要』11(仏教思想史論集II), 501-533.
- 渡辺 照宏 [1967] 撰真実論序章の翻訳研究 『渡辺照宏仏教学論集』, 東京: 筑摩書房, 1982, 59-77. (初出: 『東洋学研究』2, 1967, 15-27)
- Chatterji, Durgacharan [1930] Two Quotations in the *Tattvasaṅgraha-pañjikā*. *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* 11-2, 196-199.
- Frauwallner, Erich [1959] *Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung*. *WZKSO* 3, 83-164.
[1961] *Landmarks in the History of Indian Logic*. *WZKSO* 5, 125-148.
- Jha, Ganganatha [1939] *The Tattvasaṅgraha of Shāntaraksita with the Commentary of Kamalashīla*. 1st ed. GOS 83. Baroda, 1939. rpt. Delhi, 1986.
- Krasser, Helmut [1992] On the Relationship between Dharmottara, Śāntaraksita and Kamalashīla. In: *Tibetan Studies. Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies. Narita 1989. Volume 1: Buddhist Philosophy and Literature*, 151-158. Ed. Ihara Shōren and Yamaguchi Zuihō. 2 vols. Narita.
- La Vallée Poussin, L. de [1930] Notes sur l'ālambanaparīkṣā. *Journal Asiatique* 217, 296-297.
- Schmithausen, Lambert [1967] *Sautrāntika-Voraussetzungen in Viṃśatikā und Trīṃśikā*. *WZKSO* 11, 109-136.

付記:

筆者は、TSP bahirartha-parīkṣā 章から、非常に短いながらも、PVin I. のサンスクリット原文未回収の断片を同定したので、その重要性を鑑みて、報告しておく。

TSP 569.4-5: kevalasyāpy ālokasya darśanāt¹ | rūpasyāpy ālokarahitasya kaiścit prāniviṣeṣair upalambhāt²

PVin I. 96.2-4: yañ na snañ ba 'ba' zig kyañ mthoñ ba'i phyir dañ | snañ ba med pa'i gzugs kyañ srog chags kyi byed brag 'ga' zig gis mthoñ ba yin pa'i phyir ...³

1. ālokadarśanāt Pa GOS BBS. Tib. に基づいてかく訂正する。
2. Tib. P 161a4-5/D 122a3: ... snañ ba 'ba' zig kyañ mthoñ ba'i phyir la | snañ ba dañ bral ba'i gzugs kyañ(la D) srog chags kyi(kyis P) bye brag 'ga' zig gis dmigs pa'i phyir ro ||
3. これは、BSGT XI. 136.3-5 に PVin の名を明示して引用されている。ibid. n. 388 参照。

本論考は、日本印度学仏教学会第四十六回大会（於花園大学、1995.6.10-11）における発表資料を加筆修正したものである。これを記すにあたり、江島恵教先生、広島大学の桂紹隆先生、京都大学の船山徹氏から貴重な御教示を戴いた。ここに感謝の意を表する次第である。（但し、本論考の全責任が筆者にあることは言うまでもない。）

1995.7.30 稿

にしざわ ふみひと 東京大学大学院博士課程

Śāntarakṣita discusses the problem of “cognition-only” (*vijñaptimātratā*) in detail in the chapter *bahirartha-parikṣā* of the *Tattvasaṃgraha* (TS), on which his direct disciple Kamalaśīla gives elaborate comments in his *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP). The main purpose of this paper is to bring to light the fact that both Śāntarakṣita and Kamalaśīla have a substantially different idea on *vijñaptimātratā* from Dignāga and that Kamalaśīla explicitly attacks him, citing Dignāga's own work. On the basis of an analysis of this chapter, especially of the TS 2083 and the TSP thereon, the present writer has reached the following preliminary conclusions.

I. Śāntarakṣita criticizes in the TS 2083 the view that a grasped part of cognition (*grāhyāṃśa*) is established as an object when a certain potential power (*śakti*) exists in an immediately preceding cognition. Kamalaśīla identifies it with Dignāga's view as expressed in his *Ālambanaparikṣā* (ĀP) 6, 7b and his own *Vṛtti* (ĀPV) ad ĀP 7b. Dignāga maintains that a cognition has in itself two forms, i.e. “the grasper” and “the grasped” (*grāhya-grāhaka*). Accordingly Dignāga's theory of *dvirūpatā* of cognition is criticized here implicitly by Śāntarakṣita and explicitly by Kamalaśīla, both of whom depend upon the traditional *advaya* (cf. TS 2079) theory of the *Yogācāra*-philosophy.

II. The word “*ālaya*” occurs once in this chapter of the TSP (p. 582.19), but never in that of the TS itself. In the present writer's view, this does not necessarily mean that Kamalaśīla positively supports this concept: it may be that he was simply influenced by the Vinitadeva's interpretation as found in his *Ālambanaparikṣāṭīkā* (ĀPT). For this assumption we may adduce a few more parallel passages between the TSP and the ĀPT.

III. The TSP speaks of two contradictions, i.e. *pratibādhā* (the contradiction with what is experienced [by ordinary people]) and *abhyupeta-bādhā* (the contradiction with what is accepted [in a holy scripture of one's own system of thought]), which would arise in negating an external object in every way. They are also referred to in the ĀPT and in the Dharmapāla's commentary on ĀP/ĀPV (『觀所緣論釋』), but not in the ĀP/ĀPV itself. This, too, seems to suggest a close relationship between Kamalaśīla and the commentators of the ĀP/ĀPV; at the same time we should not overlook a methodological difference between them in evading the possibility of these two contradictions. The commentators try to solve these difficulties by regarding a grasped part of cognition (*grāhyāṃśa*) as an object (*ālambana*), though they, following Dignāga, do not acknowledge the necessity of establishing an external object as the *ālambana*. Kamalaśīla, on the other hand, accepts an external object on the level of ordinary experience (*saṃvṛtti*) just like ordinary people (*loka*), and a holy scripture (*sūtra*) which enunciates an external object, but he negates it on the level of ultimate reality (*paramārtha*). Undoubtedly, he relies upon the theory of *satyadvaya* (twofold truth) for this solution. This is extremely important, because this suggests that his philosophical position in the TSP is in line with that of Sautrāntikas on the level of *saṃvṛtti*, whereas it agrees with that of the *Yogācāras* on the level of *paramārtha*.